

栃幼連・栃幼P連共催の下、十月十二日(土)から二十六日(土)の二週間にわたり、県内の多くの幼稚園・園児・保護者・教職員が一緒になって、地域の環境美化に取り組みました。今年、近年にない台風の多い年となり、十月に入ってから一カ月立て続けに発生し、毎週のように日本に接近したり前線の影響で大雨になったりで、この期間内での実施が難しかった園も多かったことと思います。

実施園については、身近な公共施設のペットボトルや缶・吸い殻・食べ物の包装等のゴミや落ち葉清掃などの環境美化に親子が一緒になって汗を流し、幼児期から地域を愛する心・奉仕の心を育み環境や公共心を考えるよい機会になった筈です。

昔の言葉に「隣の三尺」というのがあります。昔は朝早く玄関先の掃除をして清々しい一日の始まりとし、その際、自分の家の前だけでなく、隣の家の前も三尺(約九十センチ)ぐらい踏み込んで掃きます。勿論、隣の人も我が家の前の三尺ぐらい掃いてくれます。それが暗黙の了解となっており、向う二軒両隣との付き合い方、気配りの基準となっていました。「隣の三尺」は、現代では殆ど死語化している古い言葉ですが、地域社会の一員としての自覚を幼少の時期から芽生えさせることの大切さを、毎日「隣の三尺」の気持ちをもって自宅前から親子一緒に清掃に取り組んでみると、もっと身近な所から「公共」を考えることができると思います。(総務委員長 平野 章雄)

第20回

ピカピカの栃木県

平成二十五年十月十二日(土)～二十六日(土)

時 栃 報 幼

題字／栃木県知事 福田富一氏

第115号

平成25年12月20日

一般社団法人 栃木県幼稚園連合会

〒320-0033 宇都宮市本町12-11 栃木会館2階

☎028(622)2821 FAX 028(622)2816

●編集人／馬場章信 ●発行人／石嶋 勇

■栃幼連ホームページ <http://www.youchien.or.jp>



こどもが
まんなか
PROJECT

参加園
131園

参加人数
22,118名



清掃後きれいになった公園内で遊び地域美化の意義を実感した。

芳賀地区 真岡杉の子幼稚園
期 日 十月二十一日(月)
場 所 幼稚園周辺の道路
西の台公園
参加人数 園児・教職員 百四十九名



園での触れ合い遊びの後、園周辺のゴミ拾い・ゴミ仕分けを行った。

宇都宮地区 中鶴田幼稚園
期 日 十月十八日(金)
場 所 園庭集合、園周辺
参加人数 園児・保護者 八十八名

各園の取り組み



いつも利用している観音山公園を、感謝の気持ちで清掃した。

期日 十月二十八日(月)
場所 観音山公園
参加人数 園児・保護者・教職員 二百八十名

佐野地区 洗心幼稚園



年長児(約70名)が近所の秋葉神社のゴミや落ち葉のお掃除を行った。

期日 十月十七日(木)
場所 秋葉神社
参加人数 園児・教職員 七十二名

足利地区 足利いずみ幼稚園



行事等で使用するグラウンドのゴミ拾い清掃及び落ち葉拾いを行った。

期日 十月七日(月)
場所 穂積グラウンド
参加人数 園児・教職員 三百名

小山地区 みのり幼稚園



ゴミ拾いを行った。(タバコの吸い殻、空き缶が多かった。)

期日 十月二十八日(月)
場所 幼稚園周辺道路
参加人数 園児・保護者・教職員 百五十二名

栃木地区 やすづか幼稚園



今年は夏が長引き秋の訪れが遅く思ったほど落ち葉はなかった。偶然、神社の秋祭りの前日であったため関係者の方からお礼を言われ、子どもたちは嬉しそうに掃除を楽しんでいた。

期日 十月十五日(火)
場所 アルミ前清滝神社・児童公園・社宅の周り・安良沢児童公園・神社・中学校下久次良児童公園・久次良神社
参加人数 園児・保護者・教職員 五十七名

日光地区 清滝幼稚園



県立鹿沼東高校生と一緒に、幼稚園付近の国道のゴミや空き缶等を拾った。

期日 十月二十四日(木)
場所 国道二九三号沿線
参加人数 園児・高校生・教職員 百三十七名

鹿沼地区 仁神堂幼稚園



通行中、カンやビン、たばこの吸い殻を見つけた子どもたち。公園内は大変きれいになっており、公共の場をきれいにしてくださる方がいることを知っただけでも大きな意味があったと思う。

期日 十月二十二日(火)
場所 園から防災公園までの通り
参加人数 園児・保護者・教職員 九十一名

那須地区 聖家幼稚園



園外保育に出かけたポッポ農園の広場と駐車場付近を歩きゴミを拾った。

期日 十月二十三日(水)
場所 ポッポ農園
参加人数 園児・保護者・教職員 五十三名

塩谷地区 鳥山みどり幼稚園

研修会だより

平成二十五年 第二回保育テクニカル講座

期日 平成二十五年九月六日(金)

会場 コンセーレ(大ホール)

参加 百四十二名

講師 紙ひこーき 森山 文男氏
森山恵美子氏

メモ

ブラックライトで光るパネルシアターから始まり、ギターの軽快なリズムに合わせて次々と進み、いろいろな歌やお話を紹介された。声色を変えたり、オリジナルの歌に合わせて見せることで、テンポよく、聞き手も集中して見やすいことを子ども達の立場になって感じる事ができた。「おもちゃのチャチャチャ」などよく知っている歌も、光るしかけで紹介されると引き込まれ、覚えやすいことを実感した。



後半は、ヘリコプターのプロペラが回るしかけを実際に自分で作って試してみた。滑車を使うと、花や太陽、時計などいろいろなものを回す



ことができ、いつもと違った雰囲気のパネルシアターができることを学んだ。演じ方のひと工夫や、聞き手をひきつける話し方を学び、さらに、子どもが驚き、喜ぶテクニックを学んで持ち帰ることができた。

栃幼連 設置者・園長経営研修会

期日 平成二十五年九月十一日(水)

会場 二荒山会館(鶴の間)

参加 百四十七名

内容 「子ども・子育て支援新制度について」

講師

文部科学省 幼児教育課 専門官
内閣府参事官(少子化対策担当) 付
参事官補佐 相原 康人氏

メモ

主なポイント

①認定こども園、幼稚園、保育所を通じた共通の給付(施設型給付)及び小規模保育等への給付(地域型給付)の創設。
②認定こども園制度の改善(幼保連携型認定こども園の改善等)。
③地域の実情に応じた子ども・子育て支援(利用者支援、地域子育て支援拠点、放課後児童クラブなどの「地域型子ども・子育て支援事業」)の充実。
④市町村は地域のニーズに基づき計画を策定、給付、事業を実施。
⑤消費税率引き上げによる、国及び地方の恒久財源の確保を前提。



⑥制度ごとにバラバラな政府の推進体制を整備。
⑦子ども・子育て会議の設置。
⑧早ければ平成二十七年年度を目途に新制度の施行を想定。

子ども 子育て支援新制度を踏まえた研修会

期日 平成二十五年九月二十四日(火)

会場 二荒山会館(鶴の間)

参加 八十八名

メモ

主催したこの研修会は中山委員長の下により①子ども・保育のあり方 ②保育者：職員に関する事 ③保護者：地域との関わり ④行政との関わり という四つのテーマに沿った情報交換と質疑が行われた。

県内のこども園二十園中十四園の先生方から、各園の現状と考える方を発表していただいたあと、幼稚園側として参加した先生方からの様々な質問がなされ、活発な意見交換が時間いっぱい交わされた。これからの幼稚園を考える上で大いに参考となった。



平成二十五年 第二回保育セオリー講座

期日 平成二十五年十一月十二日(金)

会場 二荒山会館(鶴の間)

参加 百五十五名

内容 「フレーベルの教育思想に学ぶ」

子ども・子育て関連3法との関連において

講師 玉川大学 名誉教授 石橋 哲成 先生

メモ

「子ども・子育て関連3法」とは、保護者が子育てについての第一義的責任を有するという基本的認識の下に、幼児期の教育・保育、地域の子ども・子育て支援を総合的に支援するものである。「保護者が子育てについての第一義的責任を有する」ということは、時代が変わり、制度が変わっても、保育の基本として変わってはいけない。「子育て」は親が主として行うものである、その手助けを側面あるいは背後からするのが幼稚園・保育園・認定こども園の子育て支援であるという説明がなされた。



また、フレーベルという人物が幼児教育をどのように考え、実践して、さらに改革していったのか、恩物やキンダーガルテンの創設など、幼稚園の基礎となる部分をフレーベルの生涯を振り返りながら知ることができた。





第二十九回全日本私立幼稚園連合会
設置者・園長全国研修会

期日 十月二十一日(月)～二十二日(火)
会場 北海道・旭川グランドホテル
参加 約六百名(うち栃幼連からは九名)
メインテーマ 「明日に向けて私立幼稚園の振興を
考える」

●記念講演 「伝えるのは命の輝き」
講師 旭山動物園長・獣医師
坂東 元氏

●行政報告
「私立幼稚園を取り巻く現状と課題」
講師 文科省初等中等教育局
教育課長 蝦名 喜之氏

《一日目》
●研究講座
(参加者が左記から一講座選択)
・教育「新制
度における
幼児教育の
質について
考える」
・振興「これ
からの私立
幼稚園の振
興活動を考
える」
・地方版子
ども・子育て
会議の状況
報告を通
して」



・経営「子ども・子育て支援新制
度から見た無償化について」
・認定こども園「新制度における
認定こども園・幼保連携型につ
いて」

宇都宮大学教育学部附属幼稚園
公開保育研究会

期日 平成二十五年十月二十九日(火)
会場 宇都宮大学教育学部附属幼稚園
参加 九十名

×ヒモ 研究会が県内外から九十名が参
加し開催された。今年度は「豊
かな暮らしを創
造する幼稚園の
環境・場や空間
を活かして」と
いう主題を掲
げ、午前は公開
保育と保育研究
発表と三つの分科会に分かれワーク
ショップが行われた。公開保育では
各学年とも「適切な環境づくりが
深く考えられており、ねらいに沿っ
た保育者の意図が感じられる内容で
あった。また、午後の分科会は大
森玲子准教授(宇大)、桂木奈巳専
任講師(共和大)、柿沼友岐氏(県レ
クエーション協会)を講師に招き、教
育・保育の質が求
められる中で、内
容の濃い学びの多
い分科会となった。



平成二十五年 第三回保育テクニカル講座
期日 平成二十五年十一月十三日(水)
会場 コンセーレ(宇都宮市)
参加 百四十名
テーマ 「あなたもマジシャン!」

講師 澤田 誠氏

×ヒモ 講師の
素敵な話
術にいつ
の間にか引き込
まれてマジック
ショーに釘付
けになったひ
と時。小さな驚
きの連続が興味
と期待を膨らま
し、夢中で見て
いる受講者の楽
しさと感動につ
ながって、会場
には歓声が起
こっていた。



見て楽しんだ後は、自分たちがや
る側になって早速実践。割り箸や
ペットボトル、牛乳パックなど身近
にある素材を使ってできる、手軽な
マジックをたくさん教わった。新聞
紙やクレヨンなど園にあるもので
すぐにできるマジックも多く、子
どもたちの驚く顔を思い浮かべ
ながら、お互いにやって見せたり
メモをとったり、あっという間に
時間が過ぎた。

栃幼連 設置者・園長研修会

期日 平成二十五年十一月十九日
会場 二荒山会館(鶴の間)
参加 百九十八名

×ヒモ 新制度は年内に暫定単価以
外がほぼまとまる予定。自治
体は六月議会では対応することにな
る。

講師 (有)遊育 代表取締役
代表取締役
吉田 正幸氏

×ヒモ 新制度は年内に暫定単価以
外がほぼまとまる予定。自治
体は六月議会では対応することにな
る。

暫定単価は五月
の連休前に示され
ると予想。私立幼
稚園は九月の園児
募集前に選択先を
最終決定していな
ければならない。



施設型給付と保護者負担を足した
額が公定価格となる。保育認定制度
により需要拡大が予想される。その
対策として新制度を整備。

新認定子ども園最大のポイント
は、四つの類型すべてに施設型給付
が保障されること。施設規模は利用
定員で考えることとなり認可定員は
意味をなさなくなる。

よほどのブランド園以外は認定子
ども園に移行しなければ二十年先は
かなり厳しくなる。移行は数年後に
実際の需要が明らかになってきてか
らでは難しくなるかもしれない。

公定価格は基礎額
と上積み額の二階建
てになるが、いろ
んな要素が積み上げ
られて単価が決ま
る。保育の質を確保
していくことがポ
イントとなる。



全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
 第四回幼児教育実践学会報告

栃幼連 教研委員会 副委員長
 小倉 庸寛

八月二十三、二十四日、福岡市で全日本私立幼稚園幼児教育研究機構主催により、第四回幼児教育実践学会が開催された。全国から約六百名が参加し、記念講演や基調講演、口頭発表・公開討論が行われた。幼児教育の質の向上が強調されていることもあり、活発な意見交換、情報交換がなされ、参加者の「質の向上」への意識の高さを感じる学会であった。

記念講演では、川崎医療福祉大学の佐々木正美教授が、「人間関係に喜びを感じる子ども」と題し、先生自身の研究や幼稚園などでの観察、個人で行っている精神心理相談教室での経験に基づき、近年の子どもの不安な行動や心の動きを丁寧にお話しされ、幼稚園教諭に求める心構え、その重要性を学んだ。

次に、基調講演として、同機構の田中雅道理事長が、「保育の質と縦断研究」について話された。今年度、同機構の研究テーマとして「砂場」をあげ、子ども・子育て支援新制度において認可基準が議論される中で、園庭の意味が重視されていない点を問題視しており、「子どもの遊び場を保証しない、面積だけを守ればよい」ということでは、子ども



もの学びを保証できない。よってその証明として砂場からスタートしたい」と力強い主張がなされた。また、保育の外部公開（公開保育）の必要性とそれに伴った幼稚園教育の良さが正當に評価される第三者評価を提案している旨が説明された。

最後に企画シンポジウムでは、若い保育者を育てる保育評価の在り方について議論がなされた。写真を基に「おこなう保育の評価方法「PEMQ」を実際に行った保育者の口頭発表の後、その視点について東京大学大学院秋田喜代美教授、西南学院大学門田理世教授、同機構研究研修副委員長黒田秀樹氏、実践者を交えた討論が行われた。「PEMQ」という新しい評価方法は、まだ研究段階であるが、若い保育者でも自分の保育を考え、語れるようにできないかを視点にしており、保育室の写真を自分で撮影し、その写真から保育を読み取り、子どもの活動を想像し、先を語れることができるように学んでいく。皆で保育の質を高め合うための研修研究技法だということ。口頭発表者をはじめ、すべての実践者が「とても有意義だった」「自信がもてる、やる気になる」などのよい反応であったことがとても印象的であった。



被災地視察から

宇大附属幼稚園 高根沢 伸友



国道を抜け南三陸町の海辺に出る頃、周辺に空き地が目立つようになりました。草の茂るその隙間にはブロック塀の基礎のような残骸が残っています。このような所まで津波の被害があったのかという私の疑問は、視界が開けて確信へと変わりました。生活を営む人々の活気溢れる街並みがそこにあったとは想像もできないような殺風景な風景の中に、物々しくも重機だけが行き交っているのです。

高台にある中学校（今は廃校になっていて、敷地内には仮設住宅が建てられています）でバスを降り、語り部さんのお話を聞かせていただきました。遠くに見える海から今自分が立っているこの場所まで津波が襲い、尊い命が奪われたという現実、津波の脅威を目の当たりにしたことがない私

ちには信じがたいものでありました。

また、河口から五キロも離れた新北上川のほとりにある大川小学校では、校舎が無残に破壊され、コンクリートの柱の中をはしる金属が獣の爪のように露出していました。非日常的な風景の中に、献花に訪れる家族の姿もありました。もし、津波の襲来に自分が直面していたら、教師としてその場でいったい何ができたのかと思いを巡らせていました。

被災地の視察を通して、私が伝えたいのは、肌で感じた被災地のリアルです。自然の猛威と、今ある日常がある瞬間から失われていく現実があること。教師として今自分に何ができるのか、深く考える機会となりました。



幼児教育センターだより



スキルアップセミナー（保育に生かせる表現運動に関する研修）

十月十七日にスキルアップセミナーを行いました。この研修は、講話や演習を通して、幼児期運動指針や幼稚園教育要領の理解を深めることを目的にしています。幼稚園二十一名、保育所二十七名、小学校一名、特別支援学校二名、計五十一名の参加がありました。

★講話「子どもの遊びと体力」

公益財団法人日本体育協会スポーツ科学研究室の森丘保典室長代理から、幼児期運動指針を基調に作られたアクティブチャイルドプログラムの説明がありました。その中で、森丘先生は、元気な子どもを育むための保育における四つのポイントを挙げていました。

・幼児期に体を動かす習慣を身に付けることは、大人になってからの健康や体力に影響を与えることを意識する。

・幼児が「おもしろい」と感じるような活動を提案し、それを「続けたい」という欲求につなげる。

・動きの質を観察することで、個々に応じた援助ができるようになる。



・幼児が自然に体を動かしたくなるような「場・しかけづくり」を意図的に行う。

これらのことを、遊びプログラムを例示しながら、具体的に分かりやすく解説していただきました。

受講者からは、「なぜ幼児期に、毎日、六十分体を動かすことが大切なのか理解できた。」「ただ遊ばせるだけでなく、専門的な視点をもって、幼児の動きを分析することも大切だと思った。」など、幼児期に体を動かして遊ぶことの重要性を再認識した感想が多く寄せられました。

アクティブチャイルドプログラムの冊子とDVDは、幼児教育センターで貸出をしています。お気軽にお問い合わせください。



★講話

「幼稚園・保育所における体づくり」

幼稚園教育要領や保育所保育指針では、幼児期の体づくりについて、どのように位置付けられているのかを確認し、実際の保育に取り入れていく内容や方法について、具体的な事例を挙げながら考えました。

受講者は、「何かができたという目に見える結果だけを重視するのではなく、過程を大切にしなければならぬ」と思った。「たくさん動いて、食べて、寝るというサイクルができるように園の生活を見直したい。」などと、自分の保育や園生活の在り方を振り返っていました。

★演習「幼稚園・保育所でできる運動遊び」

宇都宮共和国大学の河田隆教授を講師に迎え、身近なものを使って、実際に体を動かしながら、幼児が楽しめる運動遊びを体験しました。

縄や新聞紙を使った多様な遊び方は、幼児が楽しく、様々な動きを獲得するためのしかけづくりのヒントになりました。受講者は、楽しみながら体を動かす心地よさを味わった、他の受講者とのコミュニケーションを楽しんでいました。



「身近なもので、も、工夫しだいで、幼児の多様な動きを引き出せることが分かった。」「体を動かしながら、自然にコミュニケーションがとれた。」などの感想がありました。今後の保育実践の参考にしてほしいと思います。

相互職場体験研修事中訪問

「鬼怒川台幼稚園にて」

十一月十二日、宇都宮市立石井小学校の先生が、相互職場体験研修として、鬼怒川台幼稚園で、保育の実践を行いました。保育内容は、トイレットペーパーの芯で、動物を作り、それを使って遊ぶというものでした。幼児は、小学校の先生に教えてもらえるという期待に満ちあふれた表情で、活動していました。また、



幼稚園と小学校の教員は、前日に、それぞれの子どもとの発達や教育方法などについて話し合いながら、一緒に保育を構想します。その結果、当日は、息の合った援助が、絶妙なタイミングで行われました。この経験を、それぞれの教育に生かして、さらに充実した連携が図られることを期待しています。

研修案内

●スキルアップセミナー

（保育に生かせる要録の作成と活用）

二月七日（金）

講話「発達と学びをつなぐ要録の作成」

幼児教育センター顧問

神長 美津子

講話「幼保・小連携に生かせる要録」

演習「要録の記入の実際」

●トップセミナー

二月十八日（火）

講話「特別な支援を必要とする幼児への対応の在り方」

聖徳大学児童学科

教授 小田 豊 先生

★お申込みは、幼児教育センター研修案内をご覧ください。



学事だより

県文書学事課

幼稚園運営費補助金及び幼稚園教材費等補助金変更交付申請書の提出について

本年度に入園した満三歳児分等の変更交付申請書の提出については、運営費補助金、教材費等補助金ともに一月下旬を予定しています。詳細については、別途文書でお知らせしますので、期限内の提出をお願いします。

「一月の始業日現在幼稚園児数調べ」の実施について

前述の幼稚園運営費補助金及び幼稚園教材費等補助金の変更交付申請に関し、一月初旬に、一月の始業日現在における在園児数調査を行います。

回答期限 一月八日（水）

回答から交付まで短時間での作業となりますので、提出期限厳守をお願いします。

子育てランド事業における実施記録について

子育てランド事業を実施している幼稚園においては、各実施事業の参加人数や活動内容等の記録を実施報告書提出時に添付していただきますので、実施園にお

いては必ず記録を取っていただくようお願いいたします。

冬季における園児の健康管理について

感染症の予防対策については、各幼稚園において実施していただいているところですが、特に冬は、インフルエンザの集団発生が増える季節となりますので、適切な対応をお願いいたします。

学校保健安全法では、感染症にかかっているもしくはその疑いがある又はかかるおそれがある児童生徒等があるときは、当該児童生徒等に対し、出席を停止させることができ、また、感染症の予防上必要があるときは、臨時に学校の全部又は一部の休業を行うことができると定められています。

出席停止の措置を講じるには、園医その他の医師の意見を聞いた上で園長が期間を定め、当該園児の保護者に出席停止を指示することとなります。

臨時休業の実施については、欠席率や罹患患者数、地域での流行状況を考慮の上、学校設置者が適切に判断することとなります。

なお、感染症の発生に伴う学級閉鎖や休園を行った場合は、宇都宮市保健所又は、所轄の県健康福祉センターに報告する必要があります。

平成二十六年

一月～三月までの事業計画

1月6日 ※10年経験者研修
1月23～24日 全日私幼連 全国研究研修担当者会議
1月24日 設置者・園長研修会
2月7日 ※スキルアップセミナー
2月18日 ※トップセミナー
※は幼児教育センター事業

平成二十六年度 主な事業計画

4月2日 新規採用幼稚園教諭研修(集合研修)
5月16日 柘幼連 通常総会
6月26日 柘幼PTA連 総会
7月6日 就職説明会
8月13～19日 全日私幼関東地区教研大会(栃木)

訃報

●日光市 今市中央幼稚園
前理事長・前園長 大島 稔 先生
平成二十五年十月二十三日 逝去

●壬生町 やすづか幼稚園
前理事長・前園長 大久保 重義 先生
平成二十五年十一月二十六日 逝去
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

慶事

●日光市 清滝幼稚園
創立百周年記念式典
十一月十五日

●佐野市 佐野みのり幼稚園
創立四十周年記念式典
十一月三十日

編集後記

「ふじょー」「じえいじえい」
「倍返し」「お・も・て・な・し」今年の流行語大賞は、過去最多の四語が選ばれた。流行語は、世相を反映する一つの指標ともいうが、今年は言葉が豊富であり、景気が上向いている時は、世に出回る言葉の数も増える傾向だという説がある。その因果関係は何とも言えないが、本日に景気回復しているのなら嬉しい限りである。

今、幼稚園は大きな変換期を迎えようとしている。

平成二十七年の子ども・子育て支援新制度スタートに向け、現在多くの審議がなされており、急ピッチで国の制度設定が行われようとしている。年内には、公定価格と一部の事項を除く大まかな骨子が出来上がり、それを踏まえ県が認可基準を決定する。条例制定後、新幼保連携型認定こども園の申請の受付を行うというが、いずれにしても来年の園児募集前には進むべき道を選択しなくてはならないようである。慌ただしい日程で進み、まだまだ不透明な部分も多い新制度であるが、子どもたちの未来がより良いものとなり、各園が希望する道を進める事を祈念する。

幼稚園が今まで培ってきた幼児教育の根幹を守っていくため、無力な私ではあるが連合会の一員として皆様と力を合わせていく所存である。

(香川 玲子)